

市民の生涯学習を支えるため開かれている「こまえ市民大学」の運営委員長を務める高橋公子さん(78)に話を聞いた。

こまえ市民大学とは市民の学びたい意欲に対応するため平成15年にスタートしました。主催は公民館ですが、企画・運営は公募市民などで構成する運営委員会が担当し、毎月1回会合を開いています。

様々なジャンルの講座を月2回ペースで年間24、5回、主に中央公民館で土曜日の午後に開催しており、3月27日の講座で371回になりました。

あらゆる分野で活躍する専門家を講師に招く単発講座、時事・社会問題・歴史などテーマを決めて2、3回開く連続講座、東京慈恵会医科大学附属第三病院など市内の企業や組織と連携して開く地域連携講座があります。このほか、春と秋に歴史や文化遺跡を訪ねる課外講座、夏は市内などのプロの演奏家を招く納涼コンサート、冬は日本の伝統芸能と季節講座、さらに市内の事業所の経営者を講師に招く狛江事業所シリーズなども催しています。昨年は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のために活動を一時休止していた時期もありましたが、11月に再開し、ことしの2月からは海洋廃プラスチック汚染の現状や地球温暖化、宇宙から見た地球など地球環境について考える連続講座も催しています。

講座は、通常の場合、年末までに各委員がそれぞれテーマを決めて講師の候補を提案し、委員会で話し合います。

セイヨウアブラナ科に属する菜花の一種で多摩西部や川崎市多摩区などで江戸時代半ばから栽培され、市内でも栽培する農家が増えている。

3月上旬から5月上旬にかけて伸びた脇芽を切り取って収穫する。

苦みが少なく甘みがあり、癖が少ないのが特徴。軽く塩でゆでて、かつお節などをかけておひたしにするなど和食が中心だが、油と相性が良いため、バター炒めやパスタの具などにも向いている。

茎が手で簡単に折れる程度が食べ頃。葉がすぐしおれるので早めに調理すると良い。



こまえそだちからほう菜

若い人が市民大学で学んで狛江が好きになり、地域で活躍してほしい。

講師とテーマが決まると、提案者が講師と交渉します。こうやって年度末に年間スケジュールを決めています。委員は、学識経験者のほか、各分野の第一線で活躍した人や現役の人などです。講師選びには委員のネットワークを生かしており、これまでに招いた講師は370人に上ります。新型コロナウイルスの影響がまだありますが、今年度はテーマも講師も決



こまえ市民大学運営委員長

まり、日程の調整だけになっています。委員になったきっかけは長い間、東洋思想を基にした食べ物と身体に関わりなどについて講師をしていました。平成21年に2人の子を育てるシングルマザーとして働いていた私を支えてくれた母が倒れ、その介護に専念しました。半年後に母が亡くなり無気力に日々を過ごしていましたが、市民大学運営委員募集の記事を見て、気力が戻り応募しました。市民大学のことはよく分からず、自分が講師として活躍するつもりでしたが、それが誤解だったことを知りました。それでも、楽しそ

うな雰囲気ですぐに溶け込み、講座の後に、講師も市民も満足そうな顔で帰っていくのを見て、うれしくなり、続ける気になりました。

平成21年に私が委員になった時は、既にかんがりの実績を積んでいましたが、まだ市民大学を知る市民が少なく、受講者も少なかったため、スムーズな運営を心がけるとともに、PR活動の重要性を話し合い、他の委員と分かりやすいチラシづくりを心がけ、「いま市民の関心を集めていること」をテーマに市民のニーズに合わせる努力もしました。その結果、最近では受講者の数も増えてきました。ただ、昨年11月から新型コロナウイルス感染症対策のため、中央公民館地下ホールで開き、定員を40人に減らしています。

今後について「広報活動などによって、「リタイヤした人の学びの場」としての認知度が上がり、シニアのリピーターを中心に受講者が増えました。ただ、狛江市は子育て世代の人口も増えているので、そうした世代に集まってもらえる講座も必要です。若い人が、市民大学で楽しく学んで、狛江がますます好きになり、地域で活躍してもらおうことが夢です。

高橋公子さんの横顔=千代田区神田神保町生まれ。千代田区立錦華小学校、共立女子学園中・高校を経て共立女子大学へ進学、20歳で結婚のため中退。男女2人の子を育て30代半ばで医薬品・化学製品の商社でインストラクターとして5年間勤務。在職中に医学博士から東洋医学を学び、昭和60年から自然食や内面美容などの講師を務める。平成4年に長男一家と世田谷区から狛江市へ転居。21年にこまえ市民大学運営委員となり、29年に委員長就任。この間、22年~28年に狛江市むいから民家園理事、22年~29年にNPO連絡協議会理事を歴任。趣味は読書と料理、囲碁。



Shop & Service Guide いらっしゃいませ

寝具工房いづみや

狛江市内で様々な品物を販売したり、サービスを提供している店舗や企業を紹介します。

◆ 寝具工房いづみや(株式会社和泉屋製綿所)は、自然素材と伝統的な技術を大切にしながら、現代の生活にマッチしたさまざまな寝具や小物を製造販売してい

る専門店。人によって違う快適な睡眠を追求するため、顧客と話し合いながら最適な布団を作っているが、全国から注文が寄せられ、日本綿の布団は注文してから3年待ちの状態だという。

同店は江戸時代末期に創業、製綿を行ってきたが、その後、布団の製作・販売

も行うようになった。

「リサイクルできないものは作らない、売らない」がモットーの同店には綿を使った布団や座布団、布団生地、シーツ、布団カバーなどがずらりと並んでいる。中でも自然の染料を使

って染めた柔らかい色合いの製品が人気だという。店主の白井千雄さん(66)は柿渋と藍染めの染手としても知られており、自分で染めた生地で作ったオリジナルの布団も販売する。また、染めた布をスタッフの横山絵美さんがトートバックなどの袋物やランチョンマット、コースターに加工し、自然素材に関心を持つ人の人気を集めている。

店舗と別棟の製綿加工を行う作業場では年代物の機械を使って綿の打ち直しを行い、布団の工房ではこの道62年で黄綬褒章を受けた熟練職人の吉川定治さんら



布団を作る吉川さん

が手作業で布団をていねいに仕上げている。また、畑で綿の栽培も行っている。

基本となる敷き布団は、体型や寝る姿勢、体温、肌触りなどをふまえてお客と一緒に「加工指図書」を作り、それに従ってすべて手作りする。綿布団は湿気をよく吸うのが特色で、天日に干して湿気を取り、空気を吸わせれば元に戻る。5年ごとに打ち直すと、15年から20年も使えるという。こうした綿布団の知識と快眠にこだわる姿勢が評価され、長くひいきにしている顧客も多いという。

現在は、次女の千恵さんが5代目の後継者として修行中で、若い感覚を生かした製品作りに取り組んでいる。

自然素材と伝統技術を融合 快適な眠りを追求した寝具



布団や袋物などが並ぶ店内と白井千恵さん(右)、横山絵美さん

☎3489-1711 中和泉2-12-3 営業=午前10時~午後5時30分 不定休

市制施行50周年祝いコンサート

2団体が昭和歌謡とハワイアンを演奏

市制施行50周年記念コンサートが3月14日回にエコルマホールで催された。

新型コロナウイルス感染症の緊急事態宣言が延長されたため、予定されていた東京消防庁音楽隊が出演を見合わせた。狛江ともしび音楽隊、ハウオリ・ウクレレメイツの2団体が約2時間に渡って演奏、聴衆は生演奏に聴き入っていた。

狛江ともしび音楽隊は、昭和歌謡を歌い継ぐバンドとして市内のイベントに出演するほか、市内の高齢者施設などでボランティア演奏を続けている。この日は「北酒場」「ラブイズオーバー」「瀬戸の花嫁」など昭和の歌9曲を披露した。

ハウオリ・ウクレレメイツはハワイアンバンドとして活動する一方、コーラスや楽器演奏を生涯学習とし



ともしび音楽隊

ハウオリ・ウクレレメイツ

つなげよう 音楽の架け橋

at Waikiki「南国の夜」「赤いレイ」などのハワイアンに加え「時代」「花は咲く」など12曲を演奏。フラダンスも加わり、聴衆を喜ばせた。

会場には狛江消防署のコーナーも設けられ、地震への備えや火災予防を入場者に訴えていた。